

私の満州終戦前後の事情

福島県 五十嵐 直一

広告として来た満州新聞を見た。満州房産株式会社の求人広告である。給料は百五十円大変な高給である。房産とは何の事だか判らないので調べたら建設会社であった。私は、今まで村役場や農業会などに勤務した時は三十円位だった。

農家だったので農業もした。百五十円の給料にはとても魅力があり、就職してみたいと思い、父の承諾を得た。早速、東京の松村組に就職願いを提出した。面接の通知が来た。折悪しく病気の長女十九歳が肺炎で死亡した。渡満を断念しようとしたが、身の整理もし、決心したので面接を受け就職することにして来た。昭和十四年、私が四十歳の時だった。

三月十日単身で出発。東京に一泊し、伊勢神宮参拝一泊し、関金連絡船で釜山に上陸した。外地の第一歩をしるしたが、コートを通しての風はとても寒く、これから北へ向うのに寒さに耐えしのがことができるかと不安に

思った。一路新京駅前康德会館へ。およそ二百人位の人たちが集合していた。私は木工部に配属された。ボーナスも高額だった。月五十円の送金は続けた。内地は物資不足と言われていたがこちらは、飲食店等はどうこうとして賑かだった。

物資不足など考えられなかった。

会社は南満に造ろうとしたが、召集者も出はじめ、事務社員が多いので退職希望者は優遇するから申し出ると言うので、退職することにした。

南会津三頭山開拓団長は、田島町出身の神官で知名度の高い方だった。面接を受け、事務の方をお願いしたいと頼まれていた。だから退職希望をしたのだった。

私は退職金もあつたし、家族を連れてくるために一時帰国することにした。家財道具やその他の整理のため二週間程滞在した。十一歳の長男、二女十歳、三女八歳を連れて再び渡満することになった。東京一泊し、関金連絡船で、北満の吉林省老来駅下車し、左に二十四キロの地点が三頭山開拓団の位置だ。

到着早々、三女が「帰りたい」と泣き出し困ってしまっ

たものだ。先遣隊がよくやっていたかと思っていたが、団員は教養のある者が少ないので、理想開拓団の設立など考えていなかった。自分の利欲のためにだけを追求していたので、円満な運営ができていなかった。満人を馬鹿にし、侮辱するのにはおどろいた。私は、満人と協調しつき合っていたので、「先生先生」と信頼された。

私は、馬一頭、牛一頭と自分で生産した子牛一頭、にわとり五十羽、畑三町歩を耕作し、ジャガイモ、大豆、大麦を作り妻はとてよく働いた。子供達は学校、私は事務をやりこなし随分苦勞をした。収穫時はとても長いあぜを掘りおこしてジャガイモを収穫したものだ。汗を流して作ったむくいの収穫時は、ことに嬉しいものだった。

開拓団の中では、二派に分かれて対立するようになっていた。いつも個人感情等でゴタゴタしていた。私は先輩なので注目されており、理想開拓団を目標とし、正義の者は私に味方してくれた。指導員の先生方の指導力の不足が原因だった。

この三頭地区に嫩江青年訓練所から、四、五十人の団

員を連れて新潟出身の丁藤清司団長の引率のもと青年義勇開拓団として入植して来た。私はこの団長に非常に信頼を受けた。戦争が緊迫して来たので、若い団員は殆ど召集され、団長も若かったせいか、ハルピンに出て、ロシア語の翻訳の仕事を始められた。

その団長が私の事をよく理解してくれていたせいか、私に義勇隊中央医院の庶務課に入隊のため空席ができたので、事務長として迎えることに話し合いができていたので、ハルピンに出て来るようにとの連絡があった。私はこの斡旋を団長に一任して転職することにした。ところが、青年義勇開拓団員の中に、妊娠している嫁さんがいるので、料理や女の仕事を教えてもらいたかったので、奥さんを残していてももらいたいと頼まれ、私は単身で任地へ向うことにした。この団員は老来駅まで見送ってくれたのは、昭和二十年四月一日だった。

ハルピンの義勇隊中央医院は、全滿の訓練所の重病患者を収容した医院である。毎日のように死亡者が出た。私は庶務の仕事もしたので、診断書を内地に送付したり、死体の始末まで手配をした。それに配給物資の配布、会

計から回ってくる給料から、配給物資の代金を差し引いて物資を配布した。

八月に入り日本の敗戦がこくなった時、ソ連が不戦条約を破棄参戦したため、我々日本人がどれだけ悲惨の苦しみをしたかわからない。ラジオはソ連兵に没収され、かくしておいた一台で、八月十五日の重大放送を聞くことにした。全員中庭に整列し天皇陛下の玉音放送を聞いた。院長は、日本が敗けたのだ泣くのを止めて、仕事に精励してくださいと言われた。

市内では、秘文書焼きで、煙の空となった。市内では、四つ角には高射砲が設置され、軍隊は帯剣で戦場化した。ソ連軍が二三日で入城してきたので、外出出来ぬ状況になった。それに本院は、ソ連軍に接収され、私達は吉林街の旧病舎に移転した。すぐに日本人会が結成され、日本人会医療本部となった。東北満からの避難民は、花園小学校の四階建ての収容所に向かって歩く日本人でいっぱいだった。一日中銃声が続く時もあった。

東北満からの十二、三人の家族の一隊が無蓋車でやって来た。腰に麻袋を巻きつけ、ソ連軍の機関銃に頭、お

尻に銃丸を入れたまま本院にやって来たので診療をした。ハルピン駅には、病院案内の矢印や、義勇隊の案内の旗には義勇隊中央病院と書いて役立てた。各社や各団体がみんな駅でやったので駅の混雑は極まりなしの状態だった。

南下する義勇隊百人位いたが、頭髮はボーボーで目玉がギョロギョロでやせ衰えた隊員ばかりだった。隊員を一泊させるため廊下に泊めて、食事を与えた。

院長は注意深い方で、薬品を三か所に分散して保管したり、機械、食糧もそうにした。治安回復後は、機械や薬品を集めて、大手術ができた。ここだけが大手術のできる日本人会医療所となった中央病院だけだった。食糧もいつまでもストックがあるわけではないので、コリーヤン食もやって、引き延ばしてもたせた。

私も家族招致をしたので、三頭山開拓団へ行きたいと頼んだが、多忙なのだからもう少し後にしてほしいと言われたが無理を押して出かけた。二泊して家族全員と引き揚げる帰途、爆弾投下にあたりもした。もしかか一日遅かったら、家族バラバラになっていたことだろう。

私共、邦人の帰国が決定し、ハルビン十三団第一病院

列車の編成主任を命ぜられ、花園小学校を事務所として二週間を要した。九月一日乗車、翌日二日発車、途中鉄道破壊箇所もあり、現地人を雇い担送者の補充もした。渡船する場所もあったりもした。それに、二か所の検問所で、洋服や時計、万年筆等はすべて没収されてしまった。可愛想だったのは共産軍に看護婦が招集されたことだった。診断書控、委託金、領収書等みんな没収され、大事なものがなくなり全く都合悪かった。

こんなことをしながら、やっと錦西まで三日間で到着した。ここで、医療患者と健康者を分け、医療患者は日本の舞鶴港に、健康者は博多港にいずれもコロ島より出港する準備をした。出港するまで二週間も要した。

健康者隊の船はコレラ船となって、博多港に二週間も下船が許可されずにいた。この間船内に持ち入れられた、日本各地の戦災地図面で報告されたので、初めて空襲の大災害を知った。

回顧・随想録

東京都 露久保 甲 三

満鉄時代

生家、学生時代を省略し、昭和八年十月満鉄の募集があり、百人採用のところ千二百余人の応募者が新京（現長春）鉄道事務所にあり、幸運にも採用され四平駅に配属となり、十月より十二月まで満鉄社員としての教育を受け、終了後は庶務、営業関係の成績が良かったので、最初の配置が庶務係であった。

毎日の仕事は、約三百人の駅員の乗車証その他満鉄関係に協力した方や株主などに優待乗車証を発行、来客の応対、徹夜勤務で各部署より翌日の作業計画の報告を受け、駅報掲載の原稿を作成し、とう写版で印刷、配付、二十四時、各営業関係責任者より収入金を持参、受領計算し金庫に納め、収入金日報を作成、二時より仮眠、六時に起床し当日の庶務、営業の作業一覧表を黒板に書き、業務引き継ぎ、その間に収入金を興行銀行より出張した者に納入して一日の勤務を終り、独身寮に帰り、食堂の